

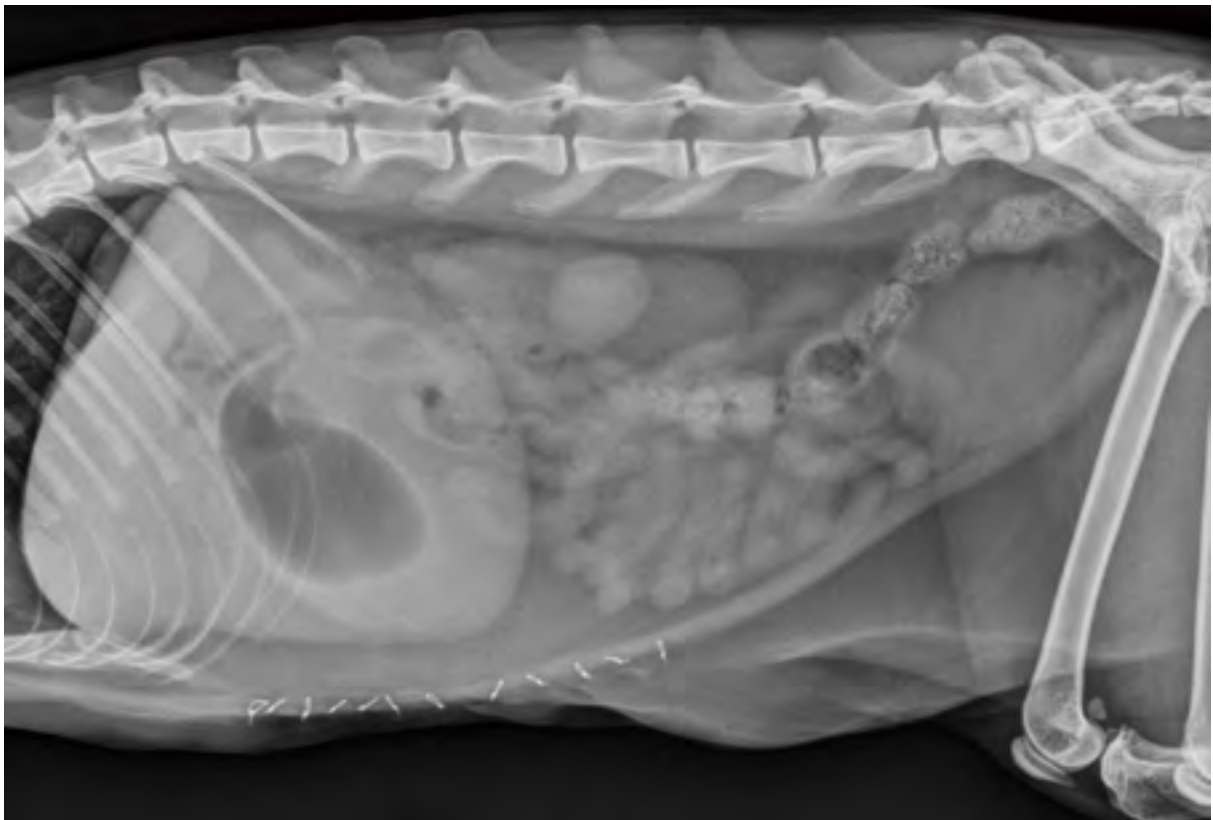
アリー 猫の嘔吐

著者：Phil Zeltzman

訳者：望月 一飛

ヒストリー

アリー、10歳、避妊雌、ドメスティック・ショート・ヘアー。3日前から嘔吐、食欲不振、嗜眠、ベッドの下に隠れたままであるという主訴で来院。身体検査（直腸温も含む）では腹部の硬直を除いて、正常範囲内であった。血液検査ではBUN（45; RR 15-32）（RRは参考値）、クレアチニン（2.1; RR 0.8-1.8）、ALT（316; RR 0-100）が上昇していた。またカリウムK（2.7; RR 3.4-5.3）、クロールCl（92; RR 107-125）が低値だった。腹部レントゲン検査で胃拡張が認められた（図1）。



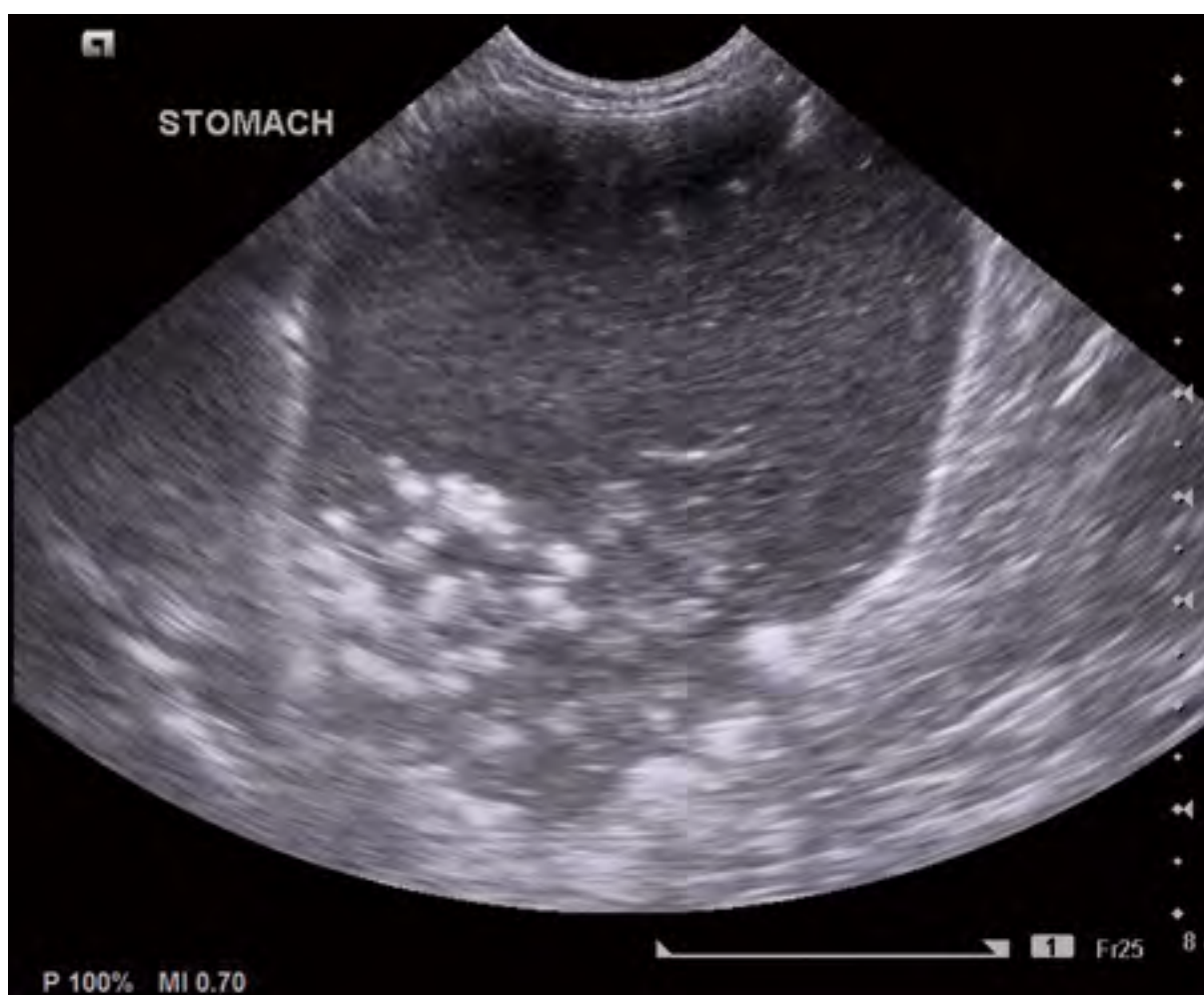
■図 1

鑑別診断

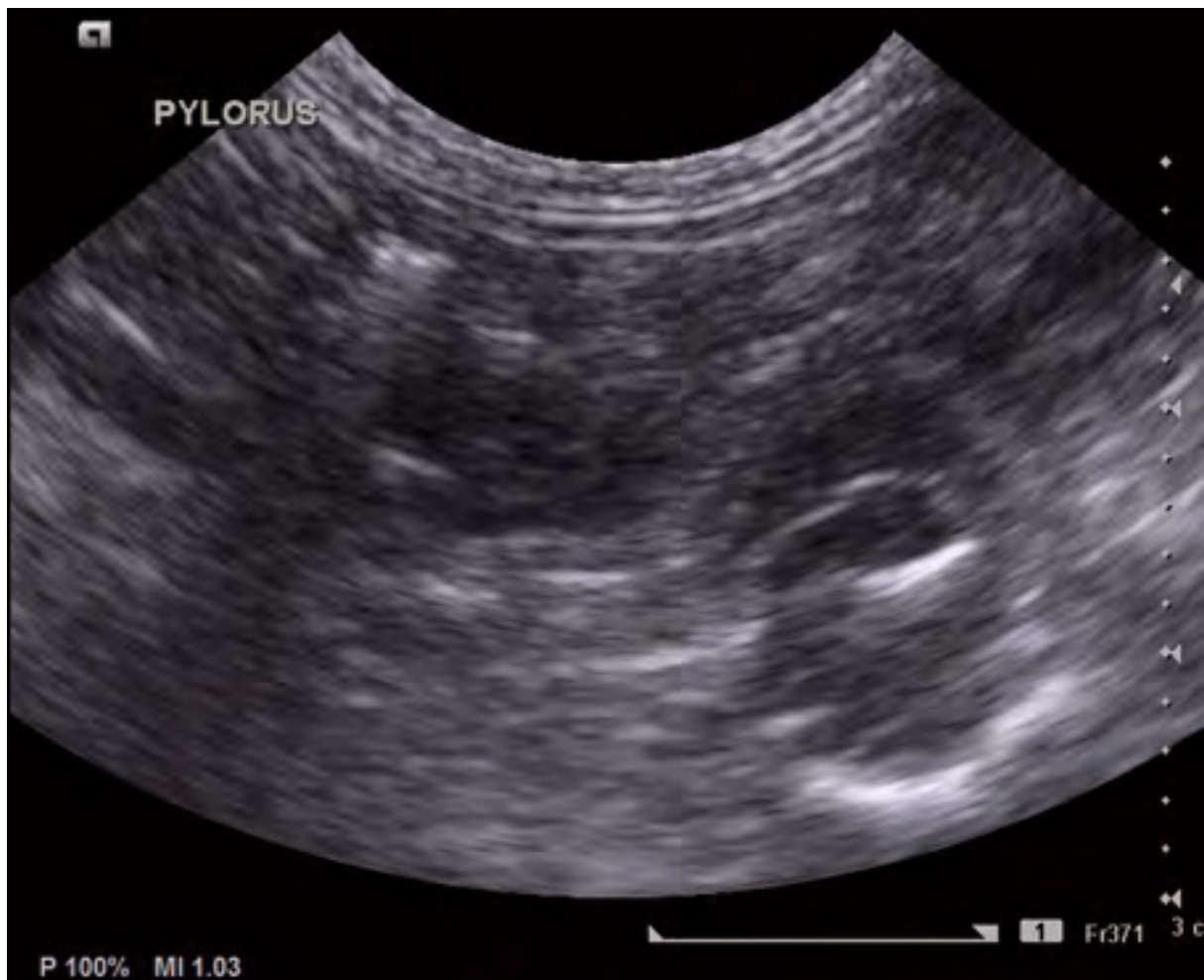
胃拡張の原因として閉塞（異物、腫瘍）、運動性の低下、吞気症、細菌の発酵、自律神経症が考えられる。腎臓の数値の増加から腎疾患が示唆され、原因として慢性腎臓病、腎盂腎炎、尿路結石、腫瘍が考えられる。

超音波検査

超音波検査を実施した。胃は中等度の量の摂取物を含み、著しく液体で膨張していた（図2）。幽門部に線状のエコー輝度を持つものが存在した（図3）。壁の構造と厚さは正常だった。胃の所見から幽門閉塞、胃炎（例えば尿毒症性の胃炎）が鑑別に挙がる。後日、再度超音波検査を行ったところ、一晩支持療法を行ったにもかかわらず胃の拡張が悪化していた。支持療法は静脈点滴、制酸剤（ラニチジン）、制吐剤（ドラセトン）を行った。



■図 2



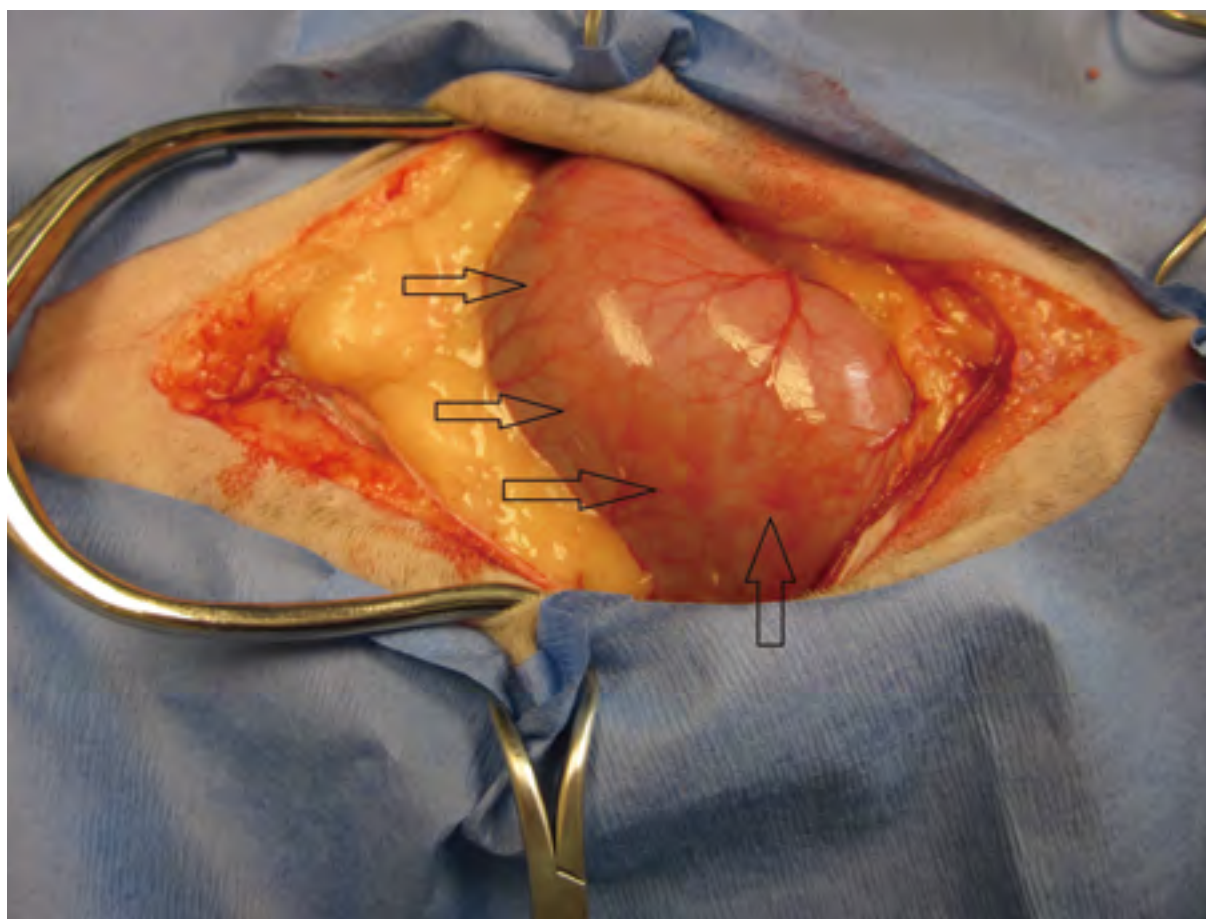
■ 図 3

超音波検査による鑑別診断

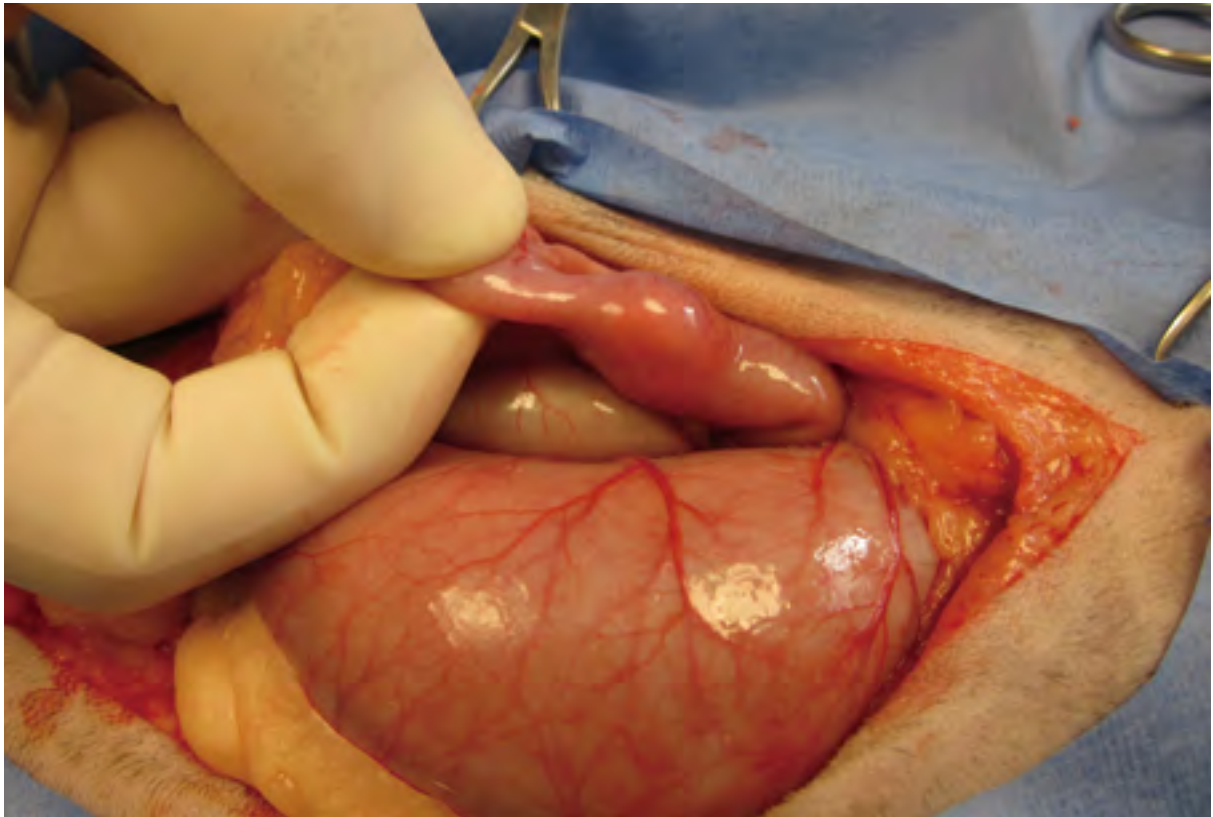
低カリウム血症と低クロール血症は胃流出路閉塞（GOO）の特徴的な所見では無いが、典型的な所見である。10歳の猫におけるGOOの鑑別診断として幽門狭窄（別名 良性幽門筋肥大、主にシャム猫で見られる）、異物、腫瘍があげられる。腫瘍は管腔外（膵臓、十二指腸、肝臓の腫瘍）または管腔内（良性のポリープ、上皮性悪性腫瘍、リンパ腫、肉腫など）がある。

治療

試験開腹が薦められた。術者は液体で膨張した胃を確認した（図4、矢印は液体のライン？を示す）。経口胃チューブを用いて、ほとんどの液体を排出した。腸は動いており、隣接した十二指腸に1cmの異物が認められた（図5）。腸に短い切開をいれ、同時に全層バイオプシーも行った（図6）。異物を除去した。4-0 PDSで腸を単純連続縫合した。肝バイオプシーを行った。他のすべての腹部臓器は正常範囲内だった。腹部を標準的な方法で閉鎖した。



■ 図 4



■ 図 5

術後のケア

術後は静脈点滴をして、モルヒネとケタミンをCRIし、ラニチジンとセフォベシン（抗菌剤）を使用した。アリーは順調に回復し、手術翌日には退院した。ブプレノルフィンの内服薬を調剤した。異物はゴム製のおもちゃの一部であることを飼い主が確認した（図 7）。

結果

手術から 2 週間後の抜糸時、アリーは正常に戻り、食事と飲水も正常になった。



■ 图 6



■図 7

病理組織

病理組織所見では肝臓は正常で、十二指腸は粘膜に軽度の形質細胞の増加が認められた。

コメント

今回の症例報告で、先入観を持たないことは重要であり、全てが年齢に起因するわけでは無いということに注意しなければならないことがわかる。胃流出路閉塞で吐いている猫の全てが腫瘍であるわけではない。確かに高齢の猫が異物を飲み込むことは珍しいが、それは起こりうることで、鑑別診断リストに入れておかなければならない。

早まった判断をして診断せずに、しっかりと精密検査を行うことで、この 10 歳の患者は完全に回復した。

Phil Zeltzman, DVM, DACVS, CVJ

著者の Dr. Phil Zeltzman は米国における獣医外科学認定専門医です。ペンシルベニア州東部からニュージャージー州西部 (USA) までの全域を巡回して診察しています。

彼のウェブサイトはこちらで閲覧でき (www.DrPhilZeltzman.com) フォローはこちらでできます (www.facebook.com/DrZeltzman) 。
